

ふるさと見て歩き

第61回

江畔寺

◆江畔寺の成立

緒川地域上小瀬地区にある臨濟宗寺院、南内山江畔寺。樹齢四百五十年の大きなイチヨウ（市天然記念物）がその歴史を物語ります。

江畔寺の所在する小瀬は、中世には小瀬氏の領地。佐竹氏十二代貞義の三男義春が南北朝期の戦いで北朝方で戦功を挙げ、父貞義からこの

地を譲られたことにより、小瀬氏の初代となつてこの地を支配しました。義春は小瀬館（現緒川中学校・緒川総合センター）、ゆうがい山城、高館の三城を築きました。南郷や野州、水戸へ通じ、小瀬で交差する諸街道を押さえるとともに、小瀬館の西側を南へ向かつて流れ那珂川に合流する緒川による水運も確保し、中世の城下町としての空間を作っていたと考えられます。その中心に成立した小瀬宿では、立野神社棟札の銘文から、江戸時代初期には町衆（町を運営する共同体）が存在していたことが確認され、富を生み出し小瀬氏の財源となつていたことが推測されます。義春は、室町幕府初代將軍となる足利尊氏の直属の家来として兄義

篤（佐竹氏十代）とともに京都などで活躍していました。



▲小瀬館跡（北東から）

江畔寺は康永三年（一三四四）、小瀬義春が出家し入道となり小庵を営み、三男の孝繁（出家して悟真妙頓）が師の夢窓疎石を招いて開山し、自身は二世となつたのが始まりと伝われます。ゆうがい山城（「ゆうがい」は「要害」、つまり「城」が変化したもの）の南麓に位置しています。



▲江畔寺本堂

◆江畔寺の文化財

江畔寺開基の立役者となつた小瀬義春は、寺の西側の高台、愛宕山に勝軍地藏として祀られています。寺伝に「義春の化身仏として祀られた」と記されることから、その像容は義春を写したもののものかもしれない。勝軍地藏信仰は鎌倉時代後期に興つたといわれ、「勝軍」には煩惱に打ち勝つという意味合いがありました。「地藏」とは言っても、普通私たちが目にする地藏とだいぶ違っています。その像容は馬に乗り甲冑を身につけ、右手に錫杖、左手に宝珠を持った姿。武をつかさどる仏像として武将に好まれました。

愛宕山の勝軍地藏は毎年一月二十四日の大祭の日のみ開帳されることとができます。



▲愛宕山勝軍地藏

また、もう一体の地藏菩薩坐像（市指定文化財）は『常山文集補遺』に水戸藩の二代藩主光圀が元禄六年（二六九三）に寄進した「古作地藏菩薩」として記されているもので、制作時期は室町から戦国時代と推定さ

れています。この前年には光圀は領内巡視の際に江畔寺に二泊しています。地藏菩薩坐像の寄進もこれが縁となつていると思われれます。その際光圀が沐浴齋戒した寺の下の河原はその後「御留淵」と呼ばれ名所となりました。現在、その場所には石碑が建てられています。

愛宕山地蔵堂の階段を下りてすぐの場所には仏殿（市指定文化財）があります。この仏殿は県内では珍しい禅宗様式（唐様）のもので、三代將軍家光のとき慶安元年（一六四九）に朱印地を与えられた頃のものとされています。窓や柱に中国風の裝飾が施され、内部には格天井（四角く区切った板を複数はめ込んだ天井）に描かれた絵画も見ることができま



▲仏殿

歴史民俗資料館大宮館

52-11450